

明治・大正時代のニューヨークで活躍した群馬県人

— 世界に挑戦した群馬の若者たち —

著者:非公開()*

はじめに

終戦直後に生まれた小学生たちは学校給食で米国から贈られた脱脂粉乳を味わった。湯川秀樹がノーベル賞を受けたニュースは少年たちの学問への夢を育んだ。当時の米国は夢の国であったが遠い国でもあった。その頃、明治時代に地域から渡米した重田善蔵という青年教師の物語を聞いて米国に憧れを持った。本研究では、地域に残されている石碑、手紙や伝説等を総合して、少年時代から漠然と追いかけてきた重田善蔵の渡米に関する疑問の解明を試みる。さらに、その疑問を追求する中で、ニューヨークで活躍していた群馬県人の存在が明らかになった。群馬県は海無し県であるが、彼らは青年時代から海外に挑戦して、ニューヨーク在住日本人のためにも惜しみなく働いていたことがわかってきた。本論文では明治大正時代にニューヨークで活躍した群馬県人に焦点を当て、人的ネットワークという視点で論じたい。

1 郷土史の世界に踏み込む

(1) 郷土史の中の伝説。

少年時代にアメリカに行ったおじさんの話を良く聞いた。その伝説は夢を誘い、本論文のモチーフになっている。伝説の主人公は、明治時代に群馬師範を卒業して渡米した重田善蔵という青年教師である。彼は、長い滞米生活後に妻と娘二人を連れて帰国したが、程なく病死してしまい、おじさんや家族の詳細は全く伝わらなかった。彼の足跡調査の一端をまとめて記録に残したが、疑問や関心は次々に広がって現在に至っている。⁽¹⁾

伝説の中にも、彼と女子教育の関係が残されているが、彼の渡米の動機や女子教育に関する調査等も別の機会に譲りたい。筆者の周辺には、少数だが彼と関係者の手紙等(本論文で一部公開)が残されている。三和町堤区に所在する、彼の墓には「大志院海旺善蔵居士」という仏式の戒名が刻まれており、彼の海外渡航歴がわずかに残っている。周囲の者はその伝説から学問への刺激を受けて勉学に励み、伝説は伝えられてきたが、その伝説も今では消滅寸前である。

(2) リサーチフェローの視点を通してみてきたこと

群馬県の郷土史では、国定忠治という主役を一例に据えて、研究した学者や郷土史家もいた。⁽²⁾かつては歴史風土や人物像も身近に感じられたが、地域の急激な開発や合併等で、郷土史への関心やその存在感が薄れている。郷土文化を後世に伝えようと活動している地域の郷土文化研究会の団体・伊勢崎市郷土文化研究会連絡協議会が『温故知新 30 年記念誌』を発行し、その中に「殖蓮見て歩き」という記事が掲載されている。⁽³⁾本研究は伊勢崎市の身近な郷土史から始まっているがその関連は広範囲に及ぶ。人的ネットワークという視点から、課題の全体把握を試みたい。

伊勢崎市の殖蓮地区は、上植木地区、下植木地区、八寸地区に分かれており、下植木地区と八寸

地区は、産業の近代化によって地域が農村地帯から、商工業地帯に変貌を遂げた。一方、上植木地区には明治以来の農村風景も色濃く残っている。伊勢崎市が発行した『三和町の民俗』⁽⁴⁾という調査書は、地域の歴史民俗等を知るための貴重な文献である。同書には、明治初期に住民の信仰や相談に応じた修験者もいたと書かれている。当時は仏教や修験という日本的文化が支配的であった。当地は、文明的には後進地域と思っていたが、最近の調査では地域には私塾もあり地域の教育レベルは外国を知りうる程度に高かったと理解できた。江戸末期から明治初期の主な庶民の初等教育は、私塾、寺子屋、郷学から公立の小学校へと変わった。その具体例を以下に示す。

重田善蔵より一世代早く群馬師範を卒業した矢島昇という校長がいて、彼の略歴は三和町曙区に所在している「矢島昇君墓碣之銘」により知ることができる。三和町は旧伊勢崎市の北部にあり、江戸時代は伊勢崎藩の上植木村に、明治時代には佐位郡殖蓮村に属した米麦と養蚕が中心の農村地帯であった。隣の本関町からは、チベット探検の先駆者と言われている矢島保治郎が生まれた。矢島保治郎は前橋中学校を出ており、彼とほぼ同年齢の重田善蔵は群馬師範を卒業した。人的ネットワークという視点から、矢島保治郎や重田善蔵は、母校の矢島昇校長から勉学の刺激を受けて学問に志したと推測できる。

最近調査した三和町堤区に所在する「博禮堂君碑」(明治12年建立)によると、矢島昇に先行して、矢嶋文五郎という私塾の教育者がいたことが明らかになった。碑文に「先生家本業農有来肆業未曾其倦勞稼」とあり、篤農家で、副業で塾教師をしたと記されている。その弟子たちが師匠の還暦を祝ってこの寿碑を建立した。彼は地域に短期間存在した郷学主静堂にも関与したらしい。彼は、後に政府方針に従い、私塾から公教育へ転じたと書かれている。矢島昇は矢嶋文五郎の影響を受けていると考えられる。重田善蔵も矢島昇や矢嶋文五郎という教育者の存在を知りつつ教師になる夢を描いたと思われる。

地域には、先祖が武家であった名家の墓域内に、篆額が「尚武」と刻まれた顕彰碑(明治27年建立)と筆子塚があり、弟子の姓名が刻まれている。武道で名をはせた人物(後の澤浦盛道)が婿入りして、弟子に武道を指導した記録を残す顕彰碑と弟子たちが建立した寿碑のようである。本研究で、日本的文化や諸芸の継承としての養子制度や家制度の重要性を実感した。

当地や近隣地域から海外渡航した人物に、矢島保治郎(探検家)、重田善蔵(教師)、矢島郡平(ビジネスマン)がいる。この三名は高等教育を受けていた。中には、矢島某という人物がおり、高等教育を受けずに渡米して、大きなトランク一つを持ち帰っただけであったという話も残っている。当時の青年のチャレンジ精神を感じる。この四名の実家は、養蚕の上州座繰りで発展した地域の事業家・梓屋とも近く、海外渡航と養蚕の関係もあったと考えられる。なお、みやま文庫の『海を渡った幕末明治の上州人』⁽⁵⁾に上州人の海外渡航例が多数あるが、長期間の海外渡航者は少なかったと思われる。明治・大正時代は、庶民でも実力や才覚があれば海外渡航ができる時代になった。群馬県から渡米して、ニュ

写真1



矢島昇君墓碣之銘

写真2



博禮堂君碑

写真3



澤浦盛道顕彰碑

ーヨークで活躍した人物を調べた結果、多彩な人物がいた。重田善蔵の実家は仏教であり、彼が渡米初期から教会活動をしていたと知って意外な印象を受けた。次項で重田善蔵の略歴をレビューして、最後にニューヨークの群馬県人の活躍を論じたい。

(3) ニューヨークで教会活動をしていた重田善蔵

明治・大正時代に、海無し県の群馬から海外に出て活躍した群馬県人がいたことを知っていささか驚いた。その人数は他県より多い方ではないが、その活躍の質において群馬県は誇りうる地位を占めている。明治・大正時代に海外渡航する目的や動機は限られていた。当時海外渡航した人物には、外交官、留学生、視察研修生、貿易商、労働者等多くの多様な階層の人物が含まれている。渡航するには、渡航費、宿泊費等に関係する経済力、外地で仕事や生活をするための語学や理解力等の基本的な学力は不可欠であった。公教育の普及による学力の向上と養蚕、製糸、織物等の産業が興り、当地区の経済力も大きく成長したので、海外渡航の経済的条件もそろってきた。

本研究の初期には、重田善蔵の渡米目的は、事業家として成功し女学校設立資金を稼いで故郷に錦を飾ることと想像した。だが、それは青年時代の夢に過ぎず、当時の世界は複雑に揺れ動き、立身出世主義の世界観を実現することは困難になったのが彼の現実であったと思われる。

ここでは、研究の発端になった重田善蔵の略歴を述べる。重田善蔵の滞米期間は約 20 年と推測されるが国内記録は学生時代の母校群馬師範(現群馬大学)以外にはほとんど残っていない。帰国後、彼がおいに宛てた手紙のレターヘッドの住所とインターネット上にあった教会が、現地新聞に出した広告の住所が一致して、彼はニューヨークの教会で働いていることが判明した。この事実をつかんだことで研究が一步前進した。

最近、彼の略歴を記載した紐育新報の死亡記事に出合った(nys_19240409_0004.pdf)。彼とニューヨークで交流があった須藤元吉(げんきち)が残した貴重な記録であり、空白であった彼の略歴の一面が明らかになった。それによると、彼は 1904 年に渡米して、1905 年から 1909 年まで羅府(ロスアンゼルス)で教会活動をしたようだ。組合教会の設立にも関与したらしい。彼の渡米初期の活動拠点は不明であるが、渡米初期から教会活動をしていたと知って意外に感じた。米国西部のカリフォルニアから滞米生活を始め、その後東部ニューヨークへ入ったのは 1917 年頃と思われる(新世界:tnw_19171103_0006)。

重田善蔵の死亡ニュースは、筆まめであり、先に帰国した碓氷郡安中町在住の須藤元吉がニューヨークの旧知に報告し、それが紐育新報に掲載されたようだ。その記事によると須藤元吉も紐育日本人基督教会の会員で、キリスト教信者であったようだ。重田善蔵は 1879 年明治 12 年 7 月 2 日生まれである。1918 年に紐育日本人基督教会幹事(前任者は片山彌六)に就任して 5 年間同職に従事後帰国したようである。1923 年 3 月ニューヨークの料亭「都」で送別会が行われ、帰国の約一年後に流行感冒に罹患して、それが悪化して 1924 年 3 月 3 日に死亡した。当時のニューヨークに形成された人的ネットワークにより、重田善蔵の記録が残されていたと考えると感慨深い。

重田善蔵の渡米直後と帰米直前の各 5 年間を除く中間の約 10 年間の活動は依然不明である。彼は日本で開発した織物製品を米国で売る貿易事業を試みて、当時の伊勢崎工業高校で開発品を作

写真 4



手紙と新聞広告(合成画像)

らせたが、結局うまく行かなかったという伝説を聞いた。帰国後、彼は同じ信徒として須藤元吉等と交流していた可能性が見えてきた。彼はキリスト教式の葬儀もされたという伝説と事実が合ってくる。彼は1923年3月10日に、紐育日本人会の有志発起人、角田柳作、高見豊彦(紐育日本人会会長、米国で初めて開業した日本人医師で熊本県出身(1875~1945年))、水谷渉三等九名による送別会を受けて、1923年4月14日に日本郵船の加賀丸で横浜に着いたようだ。それからほぼ5か月後に関東大震災に遭遇している。当時の紐育新報の記事は、人的ネットワーク記録の宝庫と考えられる。

1920年代になると、世界的に社会が不安定になり、米国内では排外主義が盛んになってきた。その頃、ニューヨークで後述のラスク委員会活動が始まった。米国在住邦人は、帰国か米国残留かを真剣に考えたと思われる。重田善蔵の場合、結論は帰国の方に傾いたと推測される。彼は米国で成功する可能性をあきらめ滞米生活に区切りを付けたと推測される。内的動機としては渡米後約20年、年齢も40歳台になったのを機会に、帰国して第二の人生を模索した可能性もある。娘の教育問題もあったと思われる。

紐育新報に掲載された紐育日本人基督教会新旧役員の送迎会の席で彼は5年間の感謝と将来の希望を述べたと報じられている(nys_19221108_0004.pdf)。この記事より、彼は教会幹事役を後任に託して帰国し、人生の後半を日本での事業に賭けたと想像される。彼が帰国後、生家のおいに「私儀相変わらず人様のために働いて居ります故ご安心下さい。」と書いた手紙が残っているが、この一言に彼の人生観・世界観の転換が認められる。この手紙は立身出世より社会の一員として生きる決意をした告白文と解釈できる。

本研究を通して「Diaspora」という概念に直面した。⁽⁶⁾ユダヤ人やその集団が本国を出て離散した歴史にその起源があり、いまだに人類が克服できない厳しい現実でもある。日本から外国へ進出した人々の運命が気になった。小学4年生のとき、友人が父親家族とブラジルへ移民した。数十年後にその友人がブラジル人として日本へ仕事にきたとき面会して、この難問に遭遇した体験がある。明治時代にも、米国に人生を賭けて渡米した日本人が多数いたことが、ハワイ移民の歴史や「在米日本人史」等からうかがえる。直近の世界史的大事件としてロシアが隣国ウクライナを侵略して、120万人のウクライナ難民が発生すると国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)が報じている。文明の発展で、交通・通信等は100年前と比較すると格段に進んだが、その影響範囲も極大化している。次章では、角田柳作と重田善蔵がニューヨークで果たした歴史的役割に言及したい。ニューヨークで働く彼らに急激な方向転換を迫った原因は何であったか検討したい。彼らはニューヨーク州当局から米国の国益に反する危険人物と見なされたことがその原因の一つと推測されるが、確証はない。

2 ラスク委員会とニューヨークの日本人団体

(1) ラスク委員会報告書に記録された日本人代表者

ラスク委員会報告書はニューヨーク州の公文書でありその歴史的価値は高い。本研究では、紹介を兼ねて、当時のニューヨーク日本人社会を理解するためにこの報告書を初歩的に利用する。米国には、第二次世界大戦後、マッカーシズム・赤狩りと言われた事件があったが、それに類する動きが1920年頃にもあった。それが、ラスク委員会活動である。その委員会の英語報告書名は長くて難解であるが以下にその正式名称を示す。

「REVOLUTIONARY RADICALISM
ITS HISTORY, PURPOSE AND TACTICS

WITH AN EXPOSITION AND DISCUSSION OF THE STEPS BEING
TAKEN AND REQUIRED TO CURB IT
BEING THE
REPORT OF THE JOINT LEGISLATIVE COMMITTEE
INVESTIGATING SEDITIOUS ACTIVITIES, FILED
APRIL 24, 1920, IN THE SENATE OF
THE STATE OF NEW YORK」

英語版 WIKIPEDIA「Lusk Committee」⁽⁷⁾によると、「ラスク委員会は、ニューヨーク州内で治安上の疑惑がある個人や組織を調査する目的で 1919 年に制定された委員会のことである。この委員会は、膨大な資料を収集、調査をして、膨大な報告書を提出後解散した」と書かれている。WIKIPEDIA 日本語版のラスク委員会項目は存在していなかった。このラスク委員会報告書は 1920 年 4 月 24 日付けで作成されており、当時紐育日本人会書記長をしていた角田柳作と紐育日本人基督教会の幹事をしていた重田善蔵が代表者としてこのラスク委員会報告書に名前を残している。

(2)ラスク委員会の目的とその性格

①ラスク委員会は膨大な資料を収集して、その調査結果を報告書にまとめて上院に提出し、かつ出版された。集められた関連資料はニューヨーク州立文書館の収蔵資料として整理され、利用のため公開されている。資料の規模は約 30 cm 立方の束に換算するとほぼ 50 個分の膨大さである。

②資料利用の手引き(1992 年版)が文書館サイトに公表されている(英文)。

③上記手引書冒頭の和訳

この冒頭部分はラスク委員会の性格と目的を的確に要約している。参考のため和訳を付した。

以下は参考和訳(超訳):「ラスク委員会は、公権力を背景に、全ニューヨーク州の社会主義者、労働者、宗教家・人道主義者等、危険人物と見なされる個人やその組織・団体を委員会に呼び出して、人物や組織の危険性を調べ上げて、その結果を報告書として発行した。そのときに、集められた膨大な資料が今、ニューヨーク州立文書館に収蔵されている。これらの収蔵記録は、第一次世界大戦後のアメリカの、人種問題、労働問題、移民問題、民族問題、市民権問題、社会問題等々の研究に非常に有益である。」

(3)在ニューヨーク主要日本人団体と角田柳作、重田善蔵の社会的立場

1914 年～1918 まで第一次世界大戦があり、米国は 1917 年に大戦に参戦した。1917 年にはロシア革命が起き、ニューヨークの社会情勢も不安定になった。渡米した日本人の多くはより良い環境を求めて居住地を変更した。ニューヨークへ移住した群馬県人もその例に漏れなかったようだ。ニューヨークでラスク委員会の活動が始まったのもアメリカの国内情勢と世界情勢が密接に関係していると思われる。偶然か歴史の必然か、角田柳作と重田善蔵はニューヨークへ来てからそれぞれ紐育日本人会の書記、紐育日本人基督教会の幹事という要職に就いた。紐育新報の記事によると紐育日本人基督教会の会員数は 219 名、会友を入れるとほぼ 400 名であった。在米日本人史によれば、1923 年頃の紐育日本人会の会員数は約 1200 名(1925 年調査の紐育総領事館内日本人の内地人は、2240 名。したがって 1000 名程度の非会員がいたと思われる)。角田柳作は仏教的背景を持ち、重田善蔵はキリスト教的背景を持っていた。この二人の群馬県人は、共に高等教育を受け教師の資格も保有しており、ニ

ニューヨーク在住日本人の二大集団のために働いていた事実は注目に値する。なお、重田善蔵は紐育日本人会の理事でもあった。

(4)角田柳作と重田善蔵に人生判断を迫ったラスク委員会

角田柳作と重田善蔵は同じ群馬県人で年齢も近く共に農家の二男であり、青少年期は似通った境遇を生きてきたと思われる。ニューヨークでは共に紐育日本人会や紐育日本人基督教会の幹事とし働き、群馬県人として交流もあった。その二人がラスク委員会報告書に名前を残す運命に巡り合い二人の人生は大きな転換期を迎えたと思われる。二人は、多数のニューヨーク在住日本人の運命を背に受けてその職務に立ち向かい、人生後半の対応に苦慮したと想像される。二人の運命も人生後半の日米関係が大きく左右したと考えられる。二人の年齢は共に 40 歳台となり、ニューヨークに止まるかそれとも日本に帰国するかを人生最大の問題として熟考したと思われる。角田柳作は苦渋の判断で米国在留を決意し、重田善蔵は女子教育等に人生後半を賭けるべく帰国したと想像される。

3 ラスク委員会報告書の詳細

(1)資料の所在と日本関係団体の記載概要

ラスク委員会報告書の原本は米国大学図書館等が保有しており、マイクロソフトやグーグルによりデジタル化された資料が、The Internet Archive 等の記録サイトで公開されていた。⁽⁸⁾巻数は4巻で、総ページ数で数千ページはありそうである。紐育日本人会と紐育日本人基督教会の内容が掲載されている目次のページは以下の通りである。なお、「Inc」という表記は法人登記された組織と推測する。紐育新報は教会堂等の資産購入のため紐育日本人基督教会が法人化を決定したと報じている(nys_19161028_0002)。ニューヨーク州政府は法令で各種の組織を掌握していたと推測する。

日本の団体でラスク委員会報告書に掲載されているのは紐育日本人会と紐育日本人基督教会だけである。この事実から両団体がニューヨーク当局から注目されていた団体であった判断できる。紐育日本人会の目的には日米の友好的連携を強化する目的も掲げている。角田柳作の人生後半の行動を読み解く鍵はここにあると思われる。なお、ページの都合でタイトルは英文のみを、和訳はタイトルと内容を掲載する。以下は該当記事の項目番号、タイトルとページ番号である。

24. Japanese Association, Inc 3231

25. Japanese Christian Institute, Inc 3231-33

(2) Japanese Association, Inc(紐育日本人会)の概要

以下は表題部分(英語)

24. The Japanese Association, Inc., 119 East 34th street, New York City, R. Tsunoda, secretary, March 16, 1920:

和訳:

24.日本人協会(法人), 東119街34丁目,ニューヨーク市, R. Tsunoda(角田柳作), 秘書, March 16, 1920 年 3 月 16 日:

第 III 条

目的

本協会の目的は、合衆国の東部に在住する日本人同士の友好を深め、真心の籠もった協力を促進し、

会員各位の人格を高揚し、社会的・知性的な福祉を推進し、お互いの権利を守り、会員同士の互助精神を涵養し、日本とアメリカ合衆国国民を結び付ける友好的な連帯を強化することを目的とする。

(3) Japanese Christian Institute, Inc(紐育日本人基督教会)の概要

以下は表題部分(英語)

25.The Japanese Christian Institute, Inc., 328 East 57th street, New York City, George Z. Shigeta, general secretary, March 16, 1920:

和訳

25. 日本人教会(法人), 東 328 街 57 丁目, ニューヨーク市, George Z. Shigeta (重田善蔵), 書記長, 1920 年 3 月 16 日:

“日本人教会(法人)は、23 年前に設立された小さなキリスト教グループが成長して今日に至り、現在は自立した組織である。

“この教会の目的は、ニューヨークとその近郊に在住する日本人の宗教的精神、兄弟愛、社会的・身体的、更に一般福祉を増進することである。当教会は、現在以下の業務に従事している。:～(以下略)

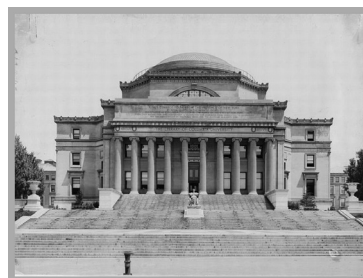
(4) ラスク委員会と角田柳作、重田善蔵の方向転換

角田柳作はハワイで日本人移民の師弟を対象にした学校教育に約 8 年間従事してから、活動拠点をニューヨーク等の米国本土に移した。⁽⁹⁾ 角田柳作や重田善蔵がニューヨークに向かったのも大都市なら仕事や雇用機会が多く、賃金も高く、行動や学問の自由も大きいという利点があるからだろう。しかし、角田柳作や重田善蔵が従事したのは在ニューヨーク日本人のために働く仕事であった。ここに二人の運命の転換点を見る。

重田善蔵は 1918 年に紐育日本人基督教会幹事に就任した。角田柳作が紐育日本人会の幹事に就任したのが 1919 年であった。一方、ラスク委員会は 1919～1920 年に活動した。組織活動上、角田柳作も重田善蔵も、ニューヨーク州政府という権力に直面したと思われる。ラスク委員会に提出された資料は、団体名、所在地、代表者名、定款(目的、活動内容)等である。ニューヨークに所在する主要外国の大団体はニューヨーク州当局に完全に掌握されていた。

ラスク委員会の活動は現地新聞にも報じられず、知っていたのは団体代表者や少数の関係者のみと考えられる。重田善蔵は 1923 年 4 月頃帰国した。角田柳作は 1926 年 10 月頃紐育日本人会書記長を辞任し、1927 頃から The Japanese Culture Center(日米文化学会)の創立準備の活動を開始する。ここには、ラスク委員会の衝撃とともに角田柳作のしたたかさも見える。角田柳作は戦時中も米国にとどまり、コロンビア大学に設立された日本文化研究所の curator(専門職員、学芸員、主事.)という資格で働き、研究、学生の教育等にも従事した。角田柳作の人生後半の活動はコロンビア大学の図書

写真5



コロンビア大学図書館

館から始まったといえるだろう。重田善蔵は紐育日本人基督教会の幹事役を後任に託して母国日本へ帰国した。

4 ニューヨークで活躍した群馬県人の人物像

(1)研究の発端になった重田善蔵の人物像

渡米した群馬県人は、各自が大志を抱いて故郷をたったと思われる。調べて見るとニューヨークで活動している群馬県人たちは日本人会、県人会、教会、送迎会、懇親会等を通して頻繁に交流していた。やはり、外国にあってまず頼りになるのは同郷人や同国人であろう。改めて紐育日本人会や紐育日本人基督教会等の意義を感じた。重田善蔵は師範学校を卒業して渡米したが、教会人として活躍しており、事業家の姿は依然不明のままである。

紐育日本人基督教会の組織は教義を説く牧師、教会を運営する理事会、実務を担当する専門家・幹事から構成されていたと思われる。彼の幹事という肩書きは俗称で、英語の正式役職名は SECRETARY であったようだ。実家は仏教であったが、彼は渡米後一貫してキリスト教徒であったようだ。教会内では英語の教育にも従事しており、教師の資格もいかされていた。彼は生涯純粋さと奉仕の精神は失わず、教会を通して社会事業的職務に従事していたと思われる。人物像としては純朴な農民の姿が当てはまりそうだ。重田善蔵はラスク委員会報告書に「George Z. Shigeta」と記載されており、何らかの理由があったと思われるが未解明である。

(2)日米文化交流に一生を捧げた角田柳作の人物像

角田柳作は日米関係が不穏になり始めた 1920 年頃から米国本土で先駆的な日米文化交流事業に乗り出した。そこには、文化交流で日米間の摩擦回避を行う意図があったと思われる。彼の行動には、米国にかけた愛情と献身がみなぎっている。更に、彼の行動には無謀にも思える群馬県人気質も感じられる。戦時中の日米交流事業は角田柳作だからできたことなのだろう。

彼は、日本の教師からハワイの教師へ、ハワイの教師から米国本土の研究者へ、研究者から紐育日本人会書記へ、紐育日本人会の書記から日米文化学者へと四回の大変身を果たした。布哇植民新聞によれば、彼は、布哇中学校とその傘下の高等女学校の校長を兼務していた(hss_19110412_0003.pdf)。彼がニューヨークへ活動拠点を移した理由として、学校経営者の資質と教育者の資質とのミスマッチや対立があり、ついに校長辞任に至った(日布時事:tnj_19170217_0001.pdf)とされている。彼の辞任は人生上の仕切り直し・人生の再設計でもあった。

その後彼は、北米現地大学の聴講を通し米国や世界事情を研究し、その一年後に、「東西共通の移民心理」という記事を執筆している(日米:jan_19180114_0002.pdf)。

彼は、なぜ紐育日本人会書記に就任したか疑問に感じた。書記という仕事は学者としては評価しにくい職歴だと思われたが、この協道が彼を偉大な日米文化学者へ変身させたと推測する。彼は 1919 年に紐育日本人会の幹事に就任した。これにより、彼は日米間の矛盾や問題をつぶさに把握できたと思われる。日本人会の背後には紐育総領事館(国家の出先機関)が控え、両者は緊密な関係を保っていた。彼は国家的視野から行動できる立場になりその能力もあった。

彼は約 7 年間紐育日本人会の書記を務めたが、この期間の行動や動機はほとんど解明されていない。彼の内面を察すると、母国日本へは帰らないという捨て身の覚悟をした上で、長期的人生展望を描き、日本を出た以上米国で成功するという初心を忘れずに精進したと思われる。彼の行動の原

点にはものおじしない楽天性、泥臭い「根」、「忍」という精神もあったと思われる。このような精神は古典的だが生家の農業や仏教から生来的に身に付けていたと考えられる。

彼は在米日本人の不安や悩み事とその原因を日本人会の書記長として知り尽くしたと思われる。更に、彼は長い滞米期間中に各種の移民問題にたち向かい、現地新聞に評論記事も書いている。移民という目で自己のアイデンティティを追求していたと考えられる。移民の究極目標は移住先で成功し国籍を取得して帰化することであろう。移民問題を突き詰めれば国家の壁に突き当たる。彼は、非常に難解な連立方程式を自身に課して行動したと思われる。

彼は紐育新報の署名記事「紐育に創設せらるゝ日本の文化的事業(上)」(nys_19261013_0004.pdf)の中で、「この度愈々日本人會を辞し、この創立に余生を傾くる覚悟をきめましたのは、私に取っては自業自得引くに引かれぬ、止むに止まれぬ、全生涯必至の結論で御座います。」と決意を書いている。この文から、「自らかえりみてなおくんば、千万人と雖も、吾往かん。」という気概を感じさせられる。彼が構想した文化事業が「The Japanese Culture Center(日米文化学会)」の創設であり、この事業の延長に「日米の架け橋」という大きな日米交流事業の展望が開けたのである。日米に築かれた豊かな人脈がその事業を支えた。

角田柳作を最も大きく突き動かしたのは紐育日本人会書記長としての仕事とラスク委員会という歴史の現実であったと推測される。彼の生涯から、彼は米国を愛するが日本を捨てることもできない、いわゆる義理堅い上州人の人物像が浮かんでくる。角田柳作とドナルド・キーンの関係及び日米間で図書館学者として活躍した渋川生まれの奥泉栄三郎に関しては興味深い別の機会に論じたい。図書館事業や文化交流事業には終わりが無い。群馬県にそのような希有な事業に挑戦した先覚者がいたことを想起したい。

(3) 紐育新報社主として活躍したジャーナリスト水谷渉三の人物像

水谷渉三は紐育新報社の三代目社長であった。交遊関係から彼は群馬県人と思われるが、個人情報非常に少なく経歴等の詳細が確認できていない。外国移住者にとって、外地で発行される新聞は生活に欠かせない情報源であると共に同民族・同郷人との交流、協力、相互扶助、娯楽の提供等の役割を果たしており、彼は社会的にも重要な地位を占め尊敬されていた。

当時のニューヨークには日米時報と紐育新報の二大邦字新聞があった。後者の記事に、群馬県人が集まって故郷を思い出しつつ興じた歓迎会の歓談風景が残っている(nys_19221220_0003.pdf)。そこに、水谷渉三を思わせる「本社の水谷禿巒」という変名人物が出てくる。水谷禿巒君は『故郷偲ぶる烏川に水枯れて』などと柄になく泣き虫の馬脚を露わしたが〜と書かれており、彼は群馬県西毛地方生まれの可能性はある。

「Tokyo Life, New York Dreams」⁽¹⁰⁾の著者 Mitziko Sawada(日系研究者)は、彼の来歴の詳細はわからないと書いているが、彼が編集した「紐育日本人発展史」⁽¹¹⁾をしばしば引用している。「紐育日本人発展史」は日本人の米国進出を記録した基本文献として現代でも活用されている。彼がジャーナリストとして残した功績は記録に値する。

邦字新聞サイト:<https://hojishinbun.hoover.org/>によると、「『紐育新報』は甲斐健一と林富平により1911年に発刊された。1915年に、甲斐が日本に帰国、経営者は千本木正治になった。翌1916年、千本木も帰国、水谷渉三に経営が移り、同紙は週一回発行から週二回になった。ニューヨークの二大日本語新聞になったが、真珠湾攻撃後、廃刊になった。」と述べている。

彼は変名で紐育新報に、「三代目の後継者として」と題して、「公僕として在米同胞社会の発展、利

導に多少の貢献をなし得れば余が半生の冀望は足りる譯で有る、〜」(nys_19161230_0005.pdf)と述べており、彼が新聞事業にかけた決意が表れている。

彼は 1912 年頃、米国西部にあるカリフォルニア州の一都市アラメダに在住していたが、その後商工業の盛んな東部のニューヨークへ活動拠点を移したと思われる。アトランティックシティーで土地家屋仲買業を営む水谷渉三なる人物が好業績を達成したという新聞記事が残っている(新世界:tnw_19100104_0007)。各種の情報を総合すると、彼はニューヨークで活動する資金を作ってから 1912 年前後にニューヨークへ転住したようだ。

彼はニューヨーク転住前の正月に紐育新報に新年の挨拶広告を出している。彼の行動は計画的かつダイナミックであったようだ。千本木正治は経営者兼編集者であり、社員三名の零細企業であるが、新聞社の責任は守ると安易に合併はしない旨紐育新報に所信を書いている。水谷渉三はその千本木正治から紐育新報の全権利義務の譲渡を受けて紐育新報の経営に乗り出し経営を拡大させた。戦争が無ければ紐育新報は現地新聞として大きく発展したと思われる。

日本人のニューヨーク進出記録をまとめた「紐育日本人発展史」はラスク委員会報告書が出た翌年の 1921 年に発行された。当時の氏名が確認できる在ニューヨーク群馬県人の人数は 10 人前後と少なかったが、同書の出版には群馬県人新井領一郎が発案者の一人として関与しているようだ。「紐育日本人発展史」の発行は、米国進出を達成した日本人先駆者の記録を残すため、紐育日本人会理事会にて決定された。水谷渉三は編集者として帰朝し、各種資料の収集や関係者の協力を求めて内容の充実に貢献している。

「紐育日本人発展史」発行から約 20 年後、真珠湾攻撃の 1 年前の 1940 年に「在米日本人史」が刊行され、この書に彼の名前が残っている。彼はニューヨークへ初期進出した群馬県人であり、現地日本人社会の情報流通に大きく貢献し、日本人の発展を記録した先駆的ジャーナリスト兼経営者であった。彼はニューヨーク日本弓道会会長をも務め米国の洋弓チームと日米親善試合も行ったスポーツマンでもあった。本論が書けたのも、多く見積もっても発行部数一千部台の紐育新報が現在まで保存され、WEB 公開されているからである。

水谷渉三は水谷禿巒というあだなや紐育新報記事・戯詩銘々伝(nys_19290810_0001)に描かれたように自虐性やユーモアに富んで快活なヒューマニストでもあったと想像できる。角田柳作が構想した「The Japanese Culture Center(日米文化学会)」事業と彼が関与した「紐育日本人発展史」の発行には、世のため人のためなら一肌脱ごうというという群馬県人が共通に持っている篤志家精神・起業家精神が認められる。

ハワイタイムスの 1945 年 11 月 20 号(tht_19451120_0008)の記事は毎日新聞記事を引用して、「前紐育新報社長水谷氏逝く」というタイトルで、横浜の自宅で胃がんのため死去した、享年 58 歳であったと伝えている。この年齢から水谷渉三が紐育新報の経営に乗り出した年齢を推測すると 20 歳後半頃と思われる。水谷渉三にとっても、渡米は波乱に満ちかつ充実した人生であったように思われる。水谷渉三は単なる新聞社のオーナー社長では無く、編集も経営もこなした上に、ジャーナリストとして業績も残しており注目すべき群馬県人である。自虐の記事は水谷渉三のサービス精神の現れのように見える。

(4)ニューヨーク日本人社会の大長老新井領一郎の人物像

紐育新報は、日本人會が頌徳する人々「生糸史の権化新井翁」と題して新井領一郎の創業秘話・顕彰記事を掲載している(nys_19221122_0003.pdf)。彼が米国で成功のきっかけを作ったのは、生糸

価格の変動で大もうけできる状況になっても契約通りの売価で売り渡したことであった。この快挙で、米国業者と信頼関係を築き上げて将来の発展の手掛かりをつかんだ。彼がニューヨークで創業した頃は、朝飯は葡萄と紅茶、昼食は事務所付近の露店で買った菓子、夕食は場末の料理店で済ませ、通勤は鉄道馬車にも乗らず儉約に努めたと書かれている。彼は人間に求められる規範は人種による違いはないことをビジネスで実証し、日本人としての尊厳を世界に認知させた。当時の在米日本人は亜細亜人として中国人以下に蔑まれていたと言われる。彼は「在米日本人史」の巻頭に日米国交上の貢献者として写真が掲載されている。

彼は米国進出で成功した日本人の先駆者であるが、その誠実で質素な生き方は生涯変わらなかったようで、在米日本人ビジネス界の大長老として尊敬されていた。またゴルフ愛好家としても知られている。彼の足跡にも群馬県人としての人物像が躍如としている。なお、彼の一族は米国に帰化し、その一員に戦後の日米関係が不安定になった 1960 年代に駐日米国大使として大役を果たした E・ライシャワーがいる。当時の森村新井組に「福島延恵(のぶえ)」という群馬県人がいたようだが詳細不明であった。森村組の深堀理三郎は 1900 年にニューヨーク大学商科を卒業した群馬県人らしいが彼の詳細も不明であった。

(5)世界一周を目指した旅行家須藤元吉(1880-1964)の人物像

須藤元吉は世界一周旅行を目指し、軍楽隊を足がかりにその計画を達成した。ニューヨーク滞在時は、紐育日本人会の理事も務め、米国の飛行機情報を母国の飛行機王中島知久平に送っている。その後、1922 年 43 歳頃に紐育日本人会を退会し、訪欧視察を経て帰国したようだ。旅程では飛行機も活用し、見聞記を紐育新報に投稿しており、筆まめかつ好奇心旺盛な群馬県人であった。著書に「『明治の陸軍軍楽隊員たち：吹奏楽黎明期の先達』須藤元吉 [著]; 須藤元夫編著 陸軍軍楽隊の記録刊行会 1997」がある。彼の生涯からも、独立独歩で群れることなく自分の人生目標を達成したユニークな群馬県人として活躍した人物像が浮かび上がる。

(6)日本の経済界で頭角を現した田島繁二(しげじ)の人物像

先駆者田島弥平の海外ビジネスは広く知られているが、ニューヨークで活躍していた群馬県人に田島繁二がいたのに気付いた。在米日本人人名辞典(日米新聞社編纂 1922 年)⁽¹²⁾によると、「田島繁二:群馬県佐波郡島村 65 Broadway, New York, N.Y.、三井物産紐育支店長、1905 年渡米、明治 38 年東京高等商業学校卒業、直に三井物産会社に入社同横濱支店に勤務、同年紐育支店に転じ専心生糸業の発展に努力せり、斯界の功労者にして權威者たり、大正十年三月現職に昇任す」とある。彼はニューヨーク在勤中に紐育日本人会副会長も務め、帰国後は三井物産代表取締役、玉造船所会長、東京芝浦電気副社長を歴任した。田島繁二は二男だが後分家して一家をなした。彼がニューヨークで従事した生糸業が後の経済活動の基礎になったのは疑いないと思われる。田島繁二もニューヨークで活躍した群馬県人として忘れられない人物である。なお、同じ三井の群馬県人青木玉五郎と平井六郎なる人物もニューヨークで活躍したようだが詳細は不明である。

(7)実業家、経済評論家、教授、登山家と多彩に活躍した大島堅造の人物像

大島堅造は太田に生まれ、明治 42 年(1909 年)東京高等商業学校(現一橋大学)を卒業。住友銀行に入行、外国為替畑を歩いてニューヨーク支店次席となる。この頃の活動が紐育新報等に残っている。彼の国際感覚はニューヨーク在任中の仕事で磨かれたようだ。その後は、実業家や学者としても

活躍、更に登山家としても知られている。彼が、登山をこよなく愛したのは上州の山々や自然と親しんできた愛郷心ともつながるようだ。実業家として珍しい山好きも群馬県人を象徴しているように思われる。

おわりに

群馬県は雷と空っ風で有名であるが、海とのかかわりは少なく、明治・大正時代に海外に出て活躍した群馬県人がいたことを想像できなかった。今回の調査により、ニューヨークの日本人社会で群馬県人が重要な地位につき、在ニューヨーク日本人のために、ひいては母国日本のために活動していた歴史があったと知った。

ニューヨーク州にラスク委員会が設置された1919年時点で、ニューヨークで活動していた群馬県人の年齢を推測すると30歳から40歳前半の人物が多かった。その事実から、彼らは20歳台で渡米にチャレンジして、十数年間必死に自分の運命を切り開こうとしてきたという生き様が浮かび上がった。県境や国境を越えて海外に雄飛した先駆的群馬県青年が多数いた歴史に遭遇して、改めて群馬県発展の原動力を知った。だが、歴史に名前を残さない多数の挑戦者がいたことも忘れてはなるまい。群馬県人としてのアイデンティティは与えられるものではなく、自ら探求すべきものであるとも教えられた。

現代は多数の外国人が群馬県に在住している。現代の日本や日本人は外国や外国人とどう向き合ふべきか。明治大正時代に群馬県人が外国で活躍した歴史がそれを語ってくれると思われる。

リサーチフェロー任期中はCOVID-19感染症流行期間と重なり、活動に大きな影響を受けたが、リモート会議等新しい体験が出来た。群馬学センターの教授および関係各位には大変お世話になりました。

追記(2025/11/30):本資料は群馬学センターへ提出した論文の原稿であり、発行された最終論文と相違する可能性があります。学習用等に WEB 公開します。商用等のご遠慮下さい。著作権は公開サイト <http://af06.kazelog.jp/> の管理人に属します。

注

- (1) 重田 泰嗣『重田善蔵 物語 さらばニューヨーク』2021 年。自費出版。群馬県立図書館等に寄贈。
- (2) 高橋 敏『国定忠治を男にした女侠 菊池徳の一生』2007 年。朝日新聞社。
- (3) 伊勢崎市郷土文化研究会連絡協議会編『温故知新 伊勢崎市郷土文化研究会連絡協議会 30 周年記念誌』2018 年。
- (4) 伊勢崎市『三和町の民俗』1981 年。
- (5) 萩原進 [ほか]編『海を渡った 幕末明治の上州人』1987 年。みやま文庫。
本書「須藤元吉」の章に市販本としては唯一重田善蔵が出てくる。
- (6) 「Hoji Shinbun Digital Collection Japanese Diaspora Initiative」<https://hojishinbun.hoover.org/>
引用した新聞名は同サイトが付与したファイル名にて文末の括弧内に示す。
- (7) 「Lusk Committee」https://en.wikipedia.org/wiki/Lusk_Committee
- (8) 「The Internet Archive」<https://archive.org/>
- (9) 「早稲田大学創立 125 周年記念国際シンポジウム 角田柳作-日米の架け橋となった”Sensei”-」
https://www.wul.waseda.ac.jp/TENJI/tsunoda_symposium/aisatu.html
- (10) Mitziko Sawada『Tokyo Life, New York Dreams』1996 年。
UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS。
<http://ark.cdlib.org/ark:/13030/ft7x0nb515/>(上記著書の WEB 上公開本文)。
- (11) 紐育日本人会編『紐育日本人発展史』1921 年。紐育日本人会
- (12) 日米新聞社編『在米日本人名辞典』1922 年。日米新聞社。